仮面ライダーフレイム

ごうりゅう

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
仮面ライダーフレイム

【Ｎコード】
Ｎ０９６５Ｇ

【作者名】
ごうりゅう

【あらすじ】
ミラーワールドの死闘から数年。モンスターは根絶し、ライダーシステムも消滅したかのように思われた。しかし近年、原因不明の行方不明者が続出し連日ニュースで報道されている。行方不明者・謎の組織。１人の青年を巻き込み運命をねじ曲げていく…。

第1話ー胸騒ぎー（前書き）

初めまして。

このページを見ようと思って頂けただけで感謝です。

私の想像を文章にしてみました。

初めての経験なので、文中に不自然を感じさせてしまうことがあるかと思いますが、温かくご指摘頂けたら幸いです。

その他ご意見ご感想など頂けましたら、有り難いです。

初心者ですが宜しくお願い致します！

第1話ー胸騒ぎー

ピッピ、ピッピ。

8時にセットされた目覚まし時計を止める眠たげな青年。

「ふぁ～」

重い体を起こしておもむろにテレビのリモコンに手を伸ばした。

「朝8時のニュースです」

テレビには最近人気のある女性アナウンサーの花村美保がニュースを読み出していた。

青年はテレビをつけ冷蔵庫の中から好物のミックスジュースを取り出した。

「では続いてのニュースは、また行方不明者です」

ミックスジュースを飲みながらニュースに耳を傾けた。

「昨日未明、大阪府○○市□町で3名もの行方が分からなくなりました。警察の調べでは犯行手口から、同一犯の可能性が高いとのことで、同地区の住民にも注意を呼びかけるということです」

「え、これって近所やん…」

青年は驚きつつも外出の支度を続けた。

青年の名前は高村純平。一年ほど前に仕事を辞め、現在は定職につかずアルバイトをしている。

「あ、そろそろ出ないと」

高村はアルバイトに向かうため部屋を後にした。
高村はアルバイト先のコンビニに自転車で15分で通っている。

いつも通りの時間にコンビニに着くと、いつもとは違った表情の店長の姿があった。

「おはようございます！店長、どうかしました？なんか変ですよ。」

高村はあえて明るい口調で話し掛けた。

「あぁ、おはよう。別に何でもないぞ。今日も宜しく頼む。」そう言って店の奥に入っていった。

「おい、朝のニュース見ーへんかったんか？」

バイト仲間の宮下つとむだった。

「高村、昨日このへんで3人も行方不明になってるやろ？1人は店長の娘さんらしいで」

高村は驚いた。

「マジでか。それやとさっきのオレはかなり空気を読めてなかったな」

高村は何も考えず明るく振る舞ったことに少し嫌気を覚えた。

「ま、とりあえずオレらは仕事や！」

そういって制服を着て宮下は店に出た。

慌てて高村も制服に着替えた。

店に出るといつも見るコンビニの店内。

今までと変わらない毎日が流れていく。

しかし高村はいつもと違う、胸騒ぎを覚えるのだった…。

- 大阪府〇〇市某所 -

「はぁ、はぁ。いつまで追ってきやがる！」

スーツを着た長髪の男は息を切らして路地に身を隠している。何かに追われているようだ。

息を整え、ふと顔をあげると、向かいのビルの窓ガラスに自分の姿と、もう一つ影が写っていた。

「くそっ！」

男が再び走り出したと同時にもう一つの影も追うように動き出した。

「ちっ、逃げ切れない！」

男は自分の姿の写るガラスに向かい、炎の紋章が入ったケースを取り出した。

「変身！！」

紋章入りのケースをガラスにかざすと、男の腰にベルトが現れ、さらにベルトにケースを装着した。男は光に包まれ、次の瞬間、漆黒のスーツに真紅の鎧がまとわれた。

「覚悟しろ！」

男はガラスのむこうの世界に飛び込んだ。

- ○○市コンビニ -

高村はもうすぐバイトが終わる時間だ。朝は胸騒ぎを覚えていたが、働く内にすっかりそれは消えていた。

「今日終わってから予定ある？」

宮下が声を掛けてきた。

「いや、何もないけど…」

「ちょっと相談があんねん。付き合ってくれ」

いつもの宮下とは違う、どこか深刻な表情だった。

バイトが終わり、二人はいつもの居酒屋に向かった。

「早速やけど、さっきの相談やねんけど…」
席に着くなり宮下は深刻な顔で話し始めた。
「朝に店長の娘が行方不明って話したやろ。3人の行方不明者の内1人は店長の娘、もう1人はオレの妹やねん…」
「はぁ！？」
高村は驚きのあまり言葉を失った。
「多分行方不明の人はみんな生きてへん」
オレは妹がいなくなる瞬間をみたんや」
涙目になりながら宮下は語り続ける。
「鏡の中から化け物が出てきて妹をさらっていってん…」
「お先にドリンクのご注文お伺いします！」
店員が空気を読まずオーダーを取りにきた。
2人はビールを注文し、話を再開した。
「鏡の中から？」
高村の問いかけに宮下は頷いた。
「オレも目の前に映る光景が信じれへんかった。鏡から化け物が出

てきて、その化け物が妹を連れて鏡の中に戻っていった…」

「お待たせしました！ビールお持ち致しました！」

店員はビール置くと別の客の注文を取りにいった。

高村は店員の手首に何やら文字のタトゥーが彫られていることに気づいたが宮下の話に戻した。

「宮下、正直信じにくいねんけど、見間違いとかではないねんな？」

ビールを注ぎながら高村は言った。

「確かにアホみたいなことを言ってるかも知れへんけど、マジや」

そう言うと宮下は注がれたビールを飲み干した。

「話には続きがあるねん。その後警察が色々調べててんけど、警察とは違う感じの人らが来てん」

「警察とは違う人？」

高村もグラスのビールを一気に飲み干した。

「あの様子やと警察より偉い人間やった。ＦＢＩみないな感じかな。確か手首の辺りにアルファベットのタトゥーがあったかも知れん」

「！！」

高村はビールを思わず吹き出した。

「宮下、やっぱ用事思い出した！今日はやっぱり帰ろう、悪いな」

「まだ話の途中やんけ！」

いきなりの展開に宮下は少し怒った。

「いいから！今度ちゃんと聞くから、な」

高村はすぐに会計を済ますと、興奮気味の宮下を無理矢理に店外に連れ出した。

「お前話くらい聞いてくれてもいい…ふぐぅ」

怒鳴る宮下の口を塞いだ。

「さっきの店の店員、
手首にアルファベットのタトゥーがあった」

「え、マジで」

2人は何かも分からないが、とりあえずここに居てはいけないと思い、高村の部屋に向かって繁華街を走り出した。

案の定2人を後ろから何かが追いかけてくる。2人は後ろを振り向いたが追っ手は確認できない。
高村はビルのガラス張りを横目で見ると、明らかに人ではないものが追ってきていることがわかった。

「マジかよ…。宮下、横のガラス見てみ。妹をさらった奴ってアレか？」

宮下も横目で確認する。

「まさか。こんなことってあるんだな…」

2人は無我夢中で走った。

少し走ると目の前にはスーツを着た長髪の男が立っていた。

「そのまま走って逃げろ！アイツは私が片付ける！！」

2人は長髪の男を横切り走り抜けた。そして長髪の男はケースを取り出しガラスに写る自分に向かってかざした。

「変身！！」

-高村のマンション前-

「はぁ、はぁ、はぁ。さっきの男なんやったんやろ」

高村は息を切らしながら宮下に聞いた。

「はぁはぁ、わからへんけど、はぁ、化け物を片付けるってゆうてたよな」

「お二方、あの化け物を見てしまいましたね」

突然2人の前に黒のロングコートの女が現れた。暗くてよく見えないが、かなり美形だ。

背は高くモデルのような雰囲気であった。

「ここに居ては危険です。ついて来て貰います」
状況が呑み込めない２人は言われるがままに、迎えの車に乗り込んだ。
車は黒で乗り込みが済み閉めたドアの隅に、『ＭｒＷｐ』の文字が記されていた。

第1話ー胸騒ぎー（後書き）

いかがでしたか？

妄想ワールドは（笑）

かなり見直しをした部分もあるのですが、セリフなどの繋ぎがどう書いたら分かり易くなるかがイマイチ分かりませんでした。。。

しつこいようですが、温かいご意見ご感想お待ちしてます。

第2話 - マリア -

黒の車はしばらく走った後、大きな建物の前に止まった。

「到着しました。ついて来て下さい」

そう言って美形の女は車を降り、丁寧にドアまで開けてくれた。

「サービスが良いやん」

引きつった顔の宮下が放つ精一杯の冗談だった。

この状況ではさすがに笑えないと思いながら2人は車を降りた。

目の前の建物は3階建てぐらいでそんなに大きくないものだった。

「ここにいれば安全なんですよね？」

高村は確認した。

「大丈夫です。建物の中には鏡、もしくは鏡のように姿を映すガラスなども存在しませんから」

美形の女が2人を建物の中に案内しようとした瞬間、車の窓ガラスから何かが飛び出してきた！

飛び出してきた何かはこの世のものとは言えない姿をしていた。
無理矢理例えると蜘蛛のような感じだ。
ただ体が大きく、2、3メートルはあるだろう。
高村と宮下はその巨体を見上げた。
あまりの光景に逃げるという気も起こらなかった。
この巨体は何が目的なんだろうか。ゆっくり2人に近づいて来る。
美形の女は急いで割れていない車の窓に向かい、紋章の入ったケースを取り出した。
「…変身」
美形の女は瞬く間に白い鎧が纏われた。
蜘蛛のような巨体に一撃与えると標的が変わったようだ。
変身した美形の女を追いガラスの向こうの世界に戻って行った。
「何が何だか分からなすぎる」
宮下はその場に腰を落とした。
その横で高村も立ち尽くしていた。

向こうの世界では蜘蛛の巨体と変身した女が闘っていた。
女はバックルからカードを引き抜くと、手に持っているレイピアにはめ込んだ。

「ファイナルベント」

辺りに機械音声が響いた。

空には雲がたちこめ突然風が吹き雪が降り出した。
そして蜘蛛の巨体の上にさらに大きな蒼い鳥が現れていた。

「シヴァ、おやりなさい」

蒼い鳥は口から吹雪を出し一瞬で蜘蛛の巨体は凍りついた。

それをレイピアで一突きし粉々した。

その一部始終は現実世界からもガラスを通して見ることが出来た。

高村はその一部始終がすべて見えていた。

疑問点はいくつもあるが何から聞こうか考えていると、闘いを終え美形の女が戻って来た。

「とりあえず中に入って下さい」

美形の女は2人をやっと建物の中に案内できた。
建物の中にはもう1つ扉があった。その両端には衛兵が立っていた。

衛兵は美形の女に、

「マリア様、お帰りなさいませ」

そう言いながら深々と頭を下げた。

高村と宮下はマリアと呼ばれた美形の女が、かなり偉い人だということを確信した。

カードキー式の扉が開かれると、廊下に繋がっていた。

内装は何かの研究所のような造りをしている。

廊下にはいくつも扉があり、３番目の部屋に案内された。

部屋の中には大きな机を囲み４、５つのイスがバラバラに置かれていた。

「適当に座って」

マリアと呼ばれた女は一番近くのイスを手にとり腰掛けた。

２人も向かい側の席に腰を掛けた。

「自己紹介が遅れてすいません。私はマリアといいます」

その言葉から始まり、先ほど起こってきた状況や疑問点などを説明

してくれた。

マリアが話してくれた内容とは、

・ミラーワールドという異世界が存在すること。

・ミラーワールドにはモンスターと呼ばれる生物が生息していること。

・そのモンスターに対抗するためにライダーシステムという兵器があること。

そしてそのモンスターに狙われている、2人のどちらかを保護することがマリアの使命だということだった。

「じゃあどっちが狙われているかまだ分からないってことですか？」

話中に何も発言しなかった宮下が突然口を開いた。

「はい。残念ながら」

マリアは一瞬俯いたが話を続けた。

「失礼かも知れませんが、どちらかの周りに行方不明者がいらっし

ゃいませんか？」

宮下はかなり驚いた表情を見せた。

高村ある程度予測できた展開なので冷静になれていた。

「昨日妹がそのモンスターってヤツに連れて行かれた」

宮下は涙目になっていた。

「お気の毒に…」

マリアも完全に俯いてしまった。

高村もどこかやり切れない気持ちになった。

「今聞いた話で予測出来ることは、狙われているのは宮下さんです」

俯いたままマリアは言った。

- ○○市某所ミラーワールド -

「なんてシブトい野郎だ！」

真紅の鎧を纏ったライダーはまだ闘いの最中だった。

相手モンスターは豹に近い形をしていた。

どちらもかなり疲弊している様子だ。

ライダーはバックルからカードを抜き取り、剣に読み込ました。

「ファイナルベント」

その瞬間ライダーは体中から炎が溢れ出し、剣も炎に包まれた。

「行くぞ！焔神斬！！」

モンスターは大きな炎に包まれながら真っ二つに切り裂かれた。

ライダーは現実世界に戻ってくると変身を解いたが、そのままその場に倒れ込んでしまった。

長髪は完全に乱れ、紋章の入ったケースは倒れた衝撃で近くの草むらまで転がっていった。

第3話ー運命ー

-〇〇市内病院-

『面会謝絶』の札が掛けている部屋にマリアは入っていった。

ベットに寝ているのは長髪の男だった。

ミラーワールドから戻り倒れてしまったが、通りすがりの人に通報され、一命をとりとめた。

体中に限界まで負荷がかかっており、目が覚めても今後普通に生活することは出来ない、と医者に告げられていた。

「サツキ…」

マリアはそっと声を掛けた。

サツキはマリアに顔を向けようとしなかった。

「オレは今まで何の為に闘ってきたんだ」

サツキは震えながら言うと、拳を握り締めた。

「サツキはたくさんの命を救ってきたわ」

サツキの握られた拳を、マリアは優しく手に包んだ。

「今日限りで組織からは解任されたわ」

「分かってる。この体では闘えない、もう」

マリアは包んでいた手を離した。

「ではカードデッキを私に渡して」

「それなんだが、倒れた拍子に落としてしまったみたいなんだ」

サツキはやっとマリアに顔を向けた。

「最後だっていうのに、失敗ばかりで済まない」

それを聞くとマリアは無言で病室を後にした。

- ○○市某所 -

2人組の男が大きな鏡のオブジェの前で話をしていた。

「宗太、こんな方法で呼び寄せるなんてできんの？」

「じゃあ良純君だって他に方法思いつくん？」

「いや、確かに思いつかへんけど…」

2人はそんな会話をしながら半日はその場に立っていた。

「宗太…お腹空いた」

「良純君、もうちょっとだって！」

訳のわからない自信に宗太は溢れていた。

ガシャーン！

「ウワー！！！！！」

2人のかなり後ろから悲鳴が聞こえた。

「全然違うやん…」

「全然って訳でもってないやん、良純くん」

2人は鏡に映る自分の姿に向かい、紋章の入ったケースをかざした。

「変身！」

「へんし～ん♪」

良純は琥珀色の鎧、宗太は深緑の鎧をそれぞれ纏い、ミラーワールドに向かった。

ミラーワールドには連れ去った男を貪るモンスターの姿があった。

「げっ、気持ち悪い…」

「確かにグロいなぁ」

それぞれの感想が終わるとバックルからカードを引き抜いた。

引き抜いたカードは、宗太は左手についている盾に、良純は右腿に

あるホルダーに読み込ませた。

「ショットベント」

「ソードベント」

宗太の盾には銃口が追備され、良純には短剣が両手に装備された。

「よし！じゃあいっちょ暴れ…」

宗太が喋り出したとたんに良純はモンスターに向かって走り出す。

「宗太！援護しろ！」

「はいはい。いつも闘いになると熱くなるんだから」

ウダウダ言いながら食事中のモンスターに銃口を向ける。

「喰っらえー！！」

マシンガンのように光の弾がモンスターに一直線に向かっていく。

弾がモンスターに触れた瞬間炸裂した。

弾の大きさからは想像出来ないほどの威力だ。

モンスターが怯んだ隙に良純が短剣で2発攻撃を加える。
この1度の攻撃でモンスターの右腕が地面に落ちていた。
モンスター自身も状況が理解出来ていない様子だ。
良純はバックルからカードを引き抜き、ホルダーに読み込ませた。
「ファイナルベント」
モンスターに短剣2本を突き刺し、跳び蹴りを浴びせた。
良純の着地と同時にモンスターの下の地面が割れ、そのまま地底の奥まで飲み込まれた。
「良純くんはいつも残酷な倒し方するよねー」
「オレの家族はもっと酷い死に方をしたんだ！」
淡々と良純は答えた。
- ○○市某所施設内 -

高村と宮下は机に寄り掛かり眠っていた。

「ばんっ！」

突然ドアが開いた。

２人は驚き目を覚ました。

マリアだった。

「宮下さんを狙っていたモンスターは殲滅されました。ついでに言うと妹さんの仇討ちも。」

「そうですか…。ありがとうございます」

宮下は寝起きということも相まってかなり意気消沈していた。

「では自宅までお送り致しますので行きましょう」

２人は言われるがまま車に乗り込んだ。

先に宮下を送り届け、高村のマンションに着いた。

マリアに軽く会釈すると車は去っていった。

高村は3日ぶりに部屋に戻った。

自分の部屋なのに何故か落ち着かなかった。

ベッドに横たわると、帰りの車の中を思い返した。

マリアに今回、目にした光景、聞いた話などすべて口止めされた。

もし話が漏れてしまうと、特別拘置所というところに拘留されてしまうらしい。

ついでにいうと、マリアという存在さえも口外してはいけない、ということだった。

ライダーのことは見てしまったから口止めされるのは納得できたが、ミラーワールドの存在を話したのはマリアからだった。

どうせ口止めするなら初めから話さなければ良かったのに。

何か事情があったのだろうか。

宮下の事も心配だ。

色々な出来事があったし平気なわけがない。

明日様子を見に行こう。そんなことを考えてる内に高村はいつの間にか眠りについていた。

- 翌日 -

ピピピッピピピッ

目覚ましで高村は目を覚ました。

完全には疲れはとれてないらしく体を動かすことが出来ない。

かろうじて動く左手でテレビのリモコンを掴むとテレビの電源を入れた。

ニュースがやっているみたいだ。

画面には見たことのある風景が映っている。

「宮下！？」

テレビに映っているのは明らかに宮下の家だった。

「速報です。昨日深夜未明、殺人事件が発生しました。…によると…ということで…被害者は宮下アキラさんです。警察は…」

高村は何が起こっているのかが理解できなかった。

むしろ理解すること拒んだ。

信じられない。

あらゆることが信じられない。

高村は無理矢理体を起こし、宮下の家に向かった。

宮下の家の近所に着くと、周辺には野次馬・マスコミが溢れかえっていた。

高村は野次馬の話に耳を傾けた。

「一緒にいた母親は行方不明になってるらしいわよ」

「！」

宮下は殺害されていて、母親は行方不明。

この違いに違和感を覚えた。

昨日マリアにもう大丈夫と言われたのに何故こうなってしまったのだろう。

昨日すぐに様子を見に行けば良かった。

高村は後悔するばかりだった。

「高村くん」

突然肩を叩かれた。

後ろを振り返ると、マリアだった。

「あなたに手伝って欲しい事があるの」

そう言いながら、有無を言わせず高村の手を引きまたあの車に乗りこんだ。

「宮下くんの事は非常に残念に思います」

「ほんまにそう思ってますか？」

高村は疑った。

「はい。こちらでも色々調べたのですが、不可解な点がいくつもあって…」

マリアは資料を片手に話し始めた。

マリアが言うには、モンスターはこっちの世界で人間を傷つけることは出来ないらしい。

過去のモンスターの被害者も行方不明にしかなっていないのだった。

「だから宮下くんが死んだのはモンスターの仕業ではないと思うの」

「それって普通の殺人ってこと？」

高村は話が見えない様子だ。

「そこなんだけど。宮下くんと一緒に居たお母さんは恐らくモンスターの被害にあってるのよ」

マリアは資料をめくった。

「あと、宮下くんの死亡推定時刻と、お母さんがモンスターの被害にあった時刻がほぼ同時刻なの…」

話の途中で車は目的地に着いた。

車を降りると目の前には昨日と同じ建物があった。

高村は建物の中に入ると、違う部屋に案内された。

昨日の部屋とは違い、とても広くキレイで、部屋の中央にはしっかりした長テーブルにイスがいくつも揃っていた。

「さあ掛けて、話の続きよ」

落ち着く間もなくマリアは話し出した。高村は宮下が他殺だという

推測に納得がいかなかった。

「宮下が殺される理由がどこにある？」

「それは私にも分からない。」

マリアは続けた。

「ただ可能性があるならライダーに巻き込まれた可能性はあるわ」

「ライダー？」

高村はこの前の戦闘を思い出した。

「部屋に移れたし、そろそろ本題の話をするわ」

マリアの表情が険しくなった。

「実は宮下くんの部屋からカードケースが見つかったの」

高村はこの後マリアが話すことが瞬時に予測できた。

宮下は昨日の帰宅後、サツキが戦闘を行っている場所に行っていたのだった。

宮下が到着したときにはすでに戦闘は終わっており、倒れていたサツキを見つけた。

サツキが病院に行けたのは宮下が救急車を呼んでいたからだった。

その場所でサツキが落としたカードケースを持って帰った。

…それが間違いだった。

宮下はモンスターに狙われていた母親を助けるために変身し、闘った。

それがマリアの組織の見解、いや、事実だろう。

高村は何とも言い難い感情で胸が締めつけられた。

「所有者じゃなくてもライダーになれるんですね…」

「正確に言えば少し違うけどまぁ、そんな感じよ」

マリアは一枚の紙を高村に渡した。

その紙には『契約書』と記されていた。

「ライダーには簡単になることが出来る。ただ維持するのが大変だけど」

高村は『契約書』に目を通した。

マリアの組織に入り、ライダーとして戦う。

そんな内容だった。

「宮下くんの仇をとりたいでしょ？」

確かに気持ちはあるが、高村は即答が出来なかった。

第４話ー交錯ー

高村は自分のアパートに戻っていた。

「少し考える時間をあげてもいいわ。でもあなたは必ずライダーになる決心をするわ」

別れ際にマリアに言われた言葉が高村の耳に残っていた。

この一週間、信じられない出来事を目の当たりにしてきた。

まるでテレビやマンガの世界だ。

その世界に自分が関わっていく。

高村には想像がつかなかった。

窓の外に目をやった。

今日は気持ちいいくらい良い天気だ…。

ー〇〇市内病院ー

サツキはベッドから見える窓の空を見ていた。

気分とは逆にとても良い天気だ。

自分は何故助かったのか。

そんなことばかり考えていた。

あの日の戦闘後、致命傷を負っていた。
このまま息絶える、そう自分自身が思っていた。
夜も遅く人通りもなかった。しかもワザと人目につかない所で変身したのに。
偶然に人が通ったにしても都合が良すぎる。
誰が助けを呼んだんだ…。
サツキは考えながら外を眺めていた。
コンコン、ガチャ。
病室にマリアが入ってきた。
「調子はどう？」
マリアはベッドの脇にあるイスに腰を掛けた。
「早速だけど、無くなったカードデッキが見つかったわ」
「本当か。良かった」

サツキは安堵の表情を浮かべた。

マリアはカバンから写真を取り出しサツキの前に並べた。

サツキはその中の一枚の写真を手に取った。

「これは…」

「そうよ。カードデッキは今回の保護任務のターゲットの部屋で発見されたの」

サツキは驚きを隠せなかった。

「彼は瀕死のあなた見つけて救急車を呼んだ。だからあなたは助かった。たぶんその時に持ち帰ったんだと思う」

「なるほど。是非礼を言いた…」

「でも彼はもうこの世にいないわ」

サツキはさらに驚いた。

「どうゆう事だ?」

「まだ調査中で、はっきりは言えないけど変身したのは間違いないわ」

マリアはさらに資料を取り出しサツキに渡した。

「あなたのフレイムはモンスターだけではなく、他のライダーからも狙われやすいから…。恐らく」

「まさか。関係の無い人間を巻き込んでしまうなんて…」

サツキは拳を握りしめ、うつむいた。

「とにかく詳しく事は調査中だから落ち込まないでサツキ」

すっかり落ち込んだサツキにマリアはそう言うと、資料や写真をカバンに戻し始めた。

「フレイムの後継者が現れるのも時間の問題だし、あなたは完全に自由よ」

サツキは何も言わなかった。

そのままマリアは病室を後にした。

ー〇〇市内住宅地ー

少し大きめの公園がある。
数種類の遊具に広場、トイレがある。

その公園には3、４人の子供が遊んでおり、その母親が2人ベンチでオシャベリを楽しんでいた。

「お母さーん！」

子供がすべり台の上で手を振っていた。

母親も手を振り返すと、子供はすべり台を滑り始めた。

滑り終わり、足が地面につく前に子供の姿がすべり台に吸い込まれた。

「しょう太？」

母親はすべり台に急いで向かった。

やはり子供の姿はなかった。
母親がすべり台をのぞき込むと、自分の顔が映った。
が、次の瞬間に自分の後ろに怪物が映った！

「きゃー！！！」

母親は驚きその場に倒れ込んでしまった。

―高村のマンション―

キーン

高村は耳鳴りがした。

「なんだこれ…くっ」

高村の頭に公園の状況が浮かんだ。

「何なんだよこれは！」

高村は頭を抱えた。

「行かなくていいのか？」

突然声が聞こえた。

それは洗面台の方する。

高村は恐る恐る洗面台に向かった。

しかし人の姿は無かった。
おかしい、高村は思った。
「行かなくていいのか？」
また声がした。
その声は鏡から聞こえるのだった。
鏡を見ると白衣を着た男が映っていた。
「誰だお前…」
「宮下を殺したのはライダーだ。仇をとりたくないか？」
白衣の男は黒のカードケースを高村に差し出した。
「ライダーが宮下を…どうゆうことだ」
高村はこみ上げる感情に声が震えていた。
「ライダーが宮下を殺した。それが事実だ」
白衣の男は無表情で淡々と話すのだった。

「これを受け取り戦え」

カードケースを高村の手に握らせ、白衣の男は鏡の奥に消えていった。

「宮下はライダーに殺された…」

高村はこの言葉が信じられなかったが、とにかく公園に向かった。

高村は公園に着き、辺りを見渡した。

すると、すべり台から大蛇のようなモンスターが姿を現していた。

しかもモンスターの視線の先には、人が倒れていた。

「マジで…？」

高村は一瞬どうすればいいか分からなかったが、無意識に叫んでいた。

「待てー！」

モンスターは高村の存在に気付いた。

そして高村に向かって大きな口を開き威嚇した。

「シャァァァ！！」

高村はかなりビビった様子だったが、この状況を見過ごすわけにも行かないのでモンスターに向かって走り出した。

モンスターは向かってくる高村に液体を口から吐き飛ばした。

高村は間一髪避けると、液体が当たった地面からは白い煙があがっていた。

「溶けてるやん！」

高村はモンスターに立ち向かっていることを少し後悔した。

モンスターが高村に気を取られている間に、気を失っていた母親が意識を取り戻した。

「逃げて！」

高村の声を聞いた母親は公園の外に逃げ出した。

「助けられて良かった」

高村は一安心したのも束の間、モンスターは溶液を飛ばしてくる。
このままじゃマズいと思ったが、打開策が浮かばなかった。

高村は逃げ回っている間に後ろポケットに入っているモノに気付いた。

「これは…！」

黒いカードケースだった。
今の状況を生き残るにはこの方法しかないのか…。
高村は迷ったが、覚悟を決めた。

放たれる溶液を交わしながらトイレにかけ込んだ。

そして鏡にカードケースをかざした。

すると高村にはベルトが装着された。
覚悟を決めている高村にもう迷いは無かった。

「変身！」

ベルトにカードケースをはめ込むと高村は黒い鎧にまとわれた。

体中から不思議と力がみなぎってくる。
今まで感じたことのない感覚に興奮した。

「これがライダーの力なんや」

ライダーの感覚に浸っている間に、目の前の鏡には大蛇の姿があった。

高村は招かれるように鏡の世界ーミラーワールドーに足を踏み入れた。

ミラーワールドは現実世界と全く同じ景色だった。
しいて言うなら反転していることくらい。

高村がそんな事を思っていると、大蛇が高村に向かって突進してきた！

高村はまともに突進を喰らってしまい、軽く１０メートルは吹き飛んだ。

「っ痛たた…」

生身で喰らっていたら多分絶命していたに違いない。

高村はライダーとしての感覚が不思議でたまらなかった。

「どう闘えばいいんやろう」

戸惑う高村は、自分の腰に斧があるのに気付いた。

その斧を手に取り大蛇に向かって構えた。

「突撃あるのみやな」

高村は大蛇に向かい走り出した。

なんてスピードで走ることが出来るのだろう。

これならオリンピックで金メダルも夢じゃない、そんな余計な事を考えていた。

高村は一瞬で大蛇の真下に着いた。

近くで見るとかなり巨大で全長は２０メートルはあるだろう。

そして大蛇めがけて斧を振り下ろした。

見事大蛇の体にえぐりこまれ、青い液体がにじみ出てきた。

大蛇は悲鳴らしき鳴き声を発し、頭を振り回した。

振り回した頭が高村に命中し、再び吹き飛ばされた。

思っていたよりも簡単にダメージを与えることが出来たみたいだ。
高村が起きあがろうとした瞬間、大蛇は公園の脇にあった車を尻尾で掴み、高村めがけて投げた。
これもまともに喰らってしまった。
いくら鎧をまとっていたとしても、さすがに激痛が走った。
「ぐふっ！」
高村は起き上がることができなかった。
「ベルトのカードを使え！」
洗面台の時の声だ！
高村は辺りを見渡したが、大蛇の姿以外になにもいなかった。
高村は痛みをこらえ立ち上がり、声の通りベルトからカードを抜き、斧にあるホルダーに差し込んだ。
「クラッシュベント」

カードの効果が発動すると、大蛇の周りには銀色の球体が取り囲むように浮いていた。

大蛇は高村に溶液を飛ばそうと首を後ろに下げたときに球体に触れてしまった。

その瞬間球体は爆発した！

「ギィィィィィ！！」

大蛇は悲鳴をあげた。

大ダメージを与えたみたいだ。

気を良くした高村はまたカードを引き、ホルダーに差し込んだ。

「ファイナルベント」

空が突然暗くなり、大蛇の頭上に大きな黒い球体が現れた。

手に持っている斧が反応しているみたいだ。

高村は大蛇に向かい斧で切るように振りかぶった。

すると球体は大蛇に少しずつ近づき、徐々に全体を包み込んでいった。

完全に球体に飲み込まれると、大蛇の断末魔と共に消えていった。

高村は脱力し、腰を落とした。

「倒した…？」

危機は何とか乗り越えたみたいだ。

「どうだ、ライダー・ディアボロスの力は？」

いつの間にか目の前に白衣の男が立っていた。

「その力を使って宮下くんの仇をとればいいんだよ。簡単だろう？」

白衣の男はそう言いながら笑みを浮かべていた。

「カードはキミにあげよう。使う・使わないは自由にすればいい…」

白衣の男は背を向け、歩きながら消えていった。

高村はようやく立ち上がりトイレに向かい、鏡に映る自分の姿を見た。

「宮下…」

高村は呟くと、現実世界に戻った。。

「宮下…」

高村は呟くと、現実世界に戻った。

第5話ー真相ー

ー〇〇大学研究室ー

中には学生が数人いた。

黒板には
『疑似世界の可能性』
と書かれていた。

「良純くん、レポートまとめれた？」

「なんや宗太か」

良純はカバンからノートを数冊取り出した。

「宗太はどうやった？」

「色々調べたけど、やっぱり数年前に色々事件が起きてるみたいだった」

宗太もカバンからパソコンからプリントアウトした資料を数枚出してきた。

「教授が言うよう鏡の中に異世界があるなんて信じにくいけどなぁ」

プルルル

良純のケータイが鳴りだした。

「もしもし。はい、はい、え…！？はい、分かりました」

電話を切るとノートをカバンに戻し始めた。

「良純くん、誰やったん？」

宗太は心配そうに聞いた。

「ごめん、急用ができたから帰るわ。教授にもゆうといて」

良純は急いで家に向かった。

電話の相手は警察だった。
家にいた家族に異変が起きたらしい。
朝は普通だったのに…。良純は異様な胸騒ぎを感じていた。
家の前にはパトカーが止まっていた。
良純に気付いた警官がパトカーの中から出てきた。

「この家の方ですか？」

良純は頷いた。

「ご家族のことなんですが…」

「家族がどうかしたんですか！？」

良純は声を荒げた。

良純はふと家のほうを見ると、パトカーのほかに黒い車も止まっていた。

「あなたの家族は全員殺されたの」

黒い車からマリアが出てきた。

「殺された…？」

良純は信じられなかった。

「とりあえず家に入らせて下さい！」

そう言い良純は家のドアに向かったが、
立ち入り禁止のテープが隙間無く貼られていた。
良純は後ろから警官に押さえ込まれた。

「たった今からこの家は厳重警戒施設に指定されました。なので立ち入りは許されません」

「これはオレの家やろが！」

良純は抵抗したが身動きがとれなかった。

「君には新しい家を用意するわ」

警官は良純を車に乗り込ませ、マリアも乗り込み走り出した。

ー〇〇市某所ー

「ここが新しい家よ。いきなりだけど一人暮らしになるけどね」

部屋はワンルームだが広めで、家具や電化製品も揃っていた。

ここに来るまでに良純は落ち着きを取り戻していた。

「本当に家族は死んだんですか？」

良純の問いかけにマリアは答えた。

「厳密に言えば行方不明。そして、あなたも狙われている。」

「！？」

驚いている良純を横目にマリアはソファーに腰掛けた。

「君は大学でミラーワールドについて研究してるらしいわね」

「…それがどうかしましたか？」

「ミラーワールドは存在する。住人もいるわ。人と異なった姿だけどね」

良純は突然の話に困惑した。

「言ってる意味がわからへん」

「その異世界の住人は生きる為に、人を襲う」

マリアは淡々と話を続けた。

「そしてあなたの家族も狙われた。そしてあなたも」

マリアはカバンからカードケースを取り出し、テーブルの上に置いた。

「君が自分自身を守る方法よ」

「これは…？」

良純はカードケースを手に取った。

「鏡の世界へのパスポートよ」

「鏡の世界が本当にあるなんて…」

良純はカードケースを見つめた。

遠くから声が聞こえてくる気がする。

「…ずみくん」

聞いたことある声だ。

「…しずみくん」

「良純くん！！」

「はっ！？」

良純の目の前に宗太がいる。

「はっ！？じゃないよ！良純くんが居眠りなんてめずらしいね？」

周りを見渡すといつもの研究室だ。

「…夢か」

「夢って、どんな夢見てたの？」

宗太は良純の顔を覗きこんだ。

「何でもないよ」

良純は立ち上がり研究室を出ていった。

―高村のマンション―

高村は部屋に戻っていた。
ベッドに横になりカードケースを眺め、さっきの闘いを思い出していた。

マリアの言っていたようにライダーになってしまった。

でもカードを貰ったのはマリアからではなく白衣の男からだった。

一体白衣の男は何者なんだろう。

そもそもマリアも何者なんだろう。

考えても想像がつかない。

宮下を殺したライダーはどんななんだろう。

これも手がかりがない。

やることがたくさんある。

何をやるにも、まずマリアと話をしないと…。

「どうすればマリアに会えるんだ」

―〇〇市住宅地―

さっきの公園の脇にパトカーと黒い車が止まっている。

モンスターに襲われた母親が警察を呼んでいたのだ。

その中にマリアの姿もあった。

マリアはモンスターの溶液で溶けた地面を調べていた。

公園の脇にもう一台黒い車が止まり、中から黒スーツの男が出てきた。

男は調査中のマリアに話しかけた。

「マリア様失礼します。例の青年はディアボロスになったそうです」

「どうゆうこと！？」

かがんでいたマリアは立ち上がった。

「あの子にはフレイムになってもらうはずじゃ！」

「今回はカンザキが動いたみたいです」

「カンザキが…？」

マリア困惑の表情を浮かべていたが、男は続けた。

「フレイムの計画はどうしますか？」

「とりあえず保留よ。私は今から青年に接触するわ」

公園の調査は部下の男に任し、マリアは車を走らせた。

マリアは運転をしながら今回なぜカンザキが動いたのかを考えていた。

マリアはカンザキの事は話でしか聞いたことがなかった。

話によると、カンザキはマリアの組織とは別でミラーワールドを研究しているのだ。

カンザキにライダーを作る技術があったのだろうか。何故その力を高村に授けたのか。

マリアには理解出来なかったが、何か意図があるのだろうか。

そんな事を考えていると高村のマンションに着いた。

ピンポーン

高村の部屋の呼び鈴がなった。

高村はドアののぞき穴から外を見ると、なんとマリアが立っていた。

高村は急いでドアを開いた。

「突然伺ってすいません。少し話があるのですが。」

「ちょうど良かったです。僕も話があったんで」

高村はマリアを部屋の中に案内した。

「マリアさんの話って何ですか？」

お茶をいれながら高村は聞いた。

「高村くん、白衣を着た男に会わなかった？」

高村は問いかけに驚き、お茶を注いでいた手元が狂いテーブルにこぼした。

「あ！すいません」

高村はタオルを取り出しお茶を拭き取った。

「その様子だと会ったみたいね」

高村もマリアの前に座った。

「僕もそれを話したかったんですよ」

高村はそう言うと、黒いカードケースをテーブルに置いた。

「その白衣の人にもらったカードケースなんです」

マリアはテーブルのカードケースを手に取った。

「これがディアボロス」

カードケースは黒く鈍い輝きを放っていた。

マリアはカバンから真紅のカードケースを取り出した。

「高村くんにはこれで闘ってもらうはずだったのに」

マリアは真紅のカードケースをテーブルを置いた。

「マリアさんも白衣の人も、どうして僕を闘いに巻き込むんですか？」

「それは…」

マリアは黙り込んだ。

「白衣の人が宮下はライダーに殺されたとも言ってました。マリアさんは何か知らないんですか？」

「その事も調査中だけど、宮下くんが殺されたのはこのライダー・

フレイムだからだと思う」

高村は真紅のカードケースを手に取り見つめた。

「じゃあフレイムで闘っていれば、宮下を殺したライダーに会えるんですね」

「そうです。そのカードデッキは高村くんに預けるわ。代わりにこっちのカードデッキを預かってもいいかしら？」

「それは出来ません」

高村はマリアの手から黒のカードケースを取り返した。

「そう。また気が変わったり何かあれば連絡して」

マリアはテーブルに名刺を置き、部屋を出て行った。

「宮下：仇は必ずとるから」

高村は強く決心した。

マリアは部屋を出てからケータイで電話をしていた。

「フレイム補完の第二段階が完了致しました」

ガラス張りの高層ビルの一室で電話をしている男がいた。

「そうか。フレイムの補完はうまくいきそうだな」

男は電話を切ると外の景色を眺めた。

「もうすぐ舞台が整う。もうすぐだ…。カンザキよ…」

―〇〇市某所―

街から少し外れた場所で男女のグループが話しながら歩いていた。

道の先は曲がり角になっており、ミラーが立っていた。

「この先の鏡あるやん？あそこ出るらしいよ～」

グループの女の子が言い始めた。

「出るっておばけ？」

笑いながらグループはミラーに差し掛かった。

全員でミラーを見たが、変わったモノは映らなかった。

「なんや、やっぱただの噂やん」

再びグループは歩き始めた。

「アズマ、明日どうしようか？」

返事がない。

「あれ、アズマくんおらへんけど…」

「さっきまで一緒にいたやんな？」

すると突然グループの一人が何かに掴まれ、ミラーの方に引きずられた。

「キャー！！」

引きずられるスピードが早く、誰も追いつくことができなかった。

すると上から人が飛び降りてきて、引きずる何かの上に着地した。

その衝撃で何かは掴んでいた人を離した。

「みんな逃げて！！」

飛び降りてきたのは高村だった。

高村は脇に停めてあった車に真紅のカードケースをかざした。

「…変身」

高村は真紅の鎧をまとい、ミラーワールドに吸い込まれた。

高村の前方には3メートルはある巨大なイカ型モンスターが、さっき引き込んだ男を食そうとしていた。

高村はバックルからカードを抜き取り、剣のホルダーに差し込んだ。

「シュートベント」

剣の刃の部分が赤く輝きだした。

剣を一振りするとモンスターに向かい炎の刃が放たれた。

男を掴んでいた足に命中し、男は地面に転がり落ちた。

「ぐはっ！」

男は生きているみたいだ。

良かった。高村は安心した。

「逃げて！！」

男は高村の声に気付き、物陰に隠れた。

モンスターは激しくいくつもある足を振り回した。

周りの建造物を破壊しながら高村に攻撃を加えてきた。

高村は剣で応戦した。

斬っても斬ってもモンスターの足は減らなかった。

らちがあかないので、モンスターと少し距離をとった。

バックルからカードを抜き取り、ホルダーに差し込んだ。

「アドベント」

高村の後ろに巨大な炎が現れた。

「なんだあれ…」

物陰に隠れていた男は目の前の光景が信じられなかった。

高村の巨大な炎はモンスターに向かって移動し始めた。

モンスターは炎に圧倒され怯んでいたが容赦はなかった。

みるみるうちにモンスターは炎に包まれていく。

「オォォォォォ！！」

モンスターは苦しそうだ。

高村はホルダーにもう一枚カードをセットした。

「ファイナルベント」

高村は剣を振りかざし、モンスターに向かい走り出した。

「死ねぇー！」

巨大になった炎の刃は、燃えさかるモンスターを真っ二つに切り裂いた。

モンスターは倒れてもなお燃え続け、次第に炎と共に跡形無く消えていった。

物陰から男が出て来た。

「どうも、ありがとうございます」

男は高村に頭を深々と下げた。

高村は男を連れて現実世界に戻った。

戻った高村は変身を解くと、男が話しかけてきた。

「さっきはほんまにありがとうございます」

男はまた頭を下げた。

「助けられて良かった」

高村は男の肩を叩き、ホッとした表情で答えた。

「オレ、アズマって言います。お礼をさせて下さい！」

アズマは高村の手を握りながら言うのだった。

「お礼なんていいから」

高村は握った手をほどき家に帰ろうと歩き出した。

が、アズマは付いて来る。

「なんであんなカッコいいのに変身できるんですか？」

「どうやって変身するんですか？」

アズマの質問は止まらなかった。

「いい加減にしてくれへん？」

高村は立ち止まり、アズマを睨みつけた。

「すいません…。そんなこわい顔せんでもいいじゃないすか」

アズマはすっかり落ち込み、追跡を諦めた。

高村は再び家路につくのだった。

第6話―同志―

「いらっしゃいませー」

高村は久しぶりのバイトだった。

昨日までで色んな出来事があったので、働いているという現実に違和感があった。

街はニュースは行方不明者や、モンスターの目撃談などの話題ばかりだ。

非現実的だ。

ただその非現実的な出来事に関わってしまっている。

キイーン

高村は耳鳴りがした。

モンスターがどこかに現れたみたいだ。

行かないと…。

でも今はバイト中だ。

人の命を守る力があるのに、自分の生活も守らなければ…。

すると見たことある顔が高村の目に映った。

「あ！命の恩人！！」

向こうも気付いたみたいだ。
そう、高村に気付いたのは…アズマだ！！
なんて丁度いいタイミングだろう、高村は思った。

「こんな所で働いてるんですねぇ！オレ、家が近所…」

高村は話している途中のアズマの両肩を掴み、

「アズマくん！ちょっとオレの代わりにここにいてくれ！」

そう言い残し高村はコンビニから走り去った。
アズマは呆然としていた。
コンビニからモンスターの位置はそう遠くはない。

少し走ると頭に浮かんだイメージと同じ場所に着いた。

繁華街の雑居ビルの窓ガラスにモンスターの姿がある。

周りには逃げ惑う人々、ガラスやビルの破片が飛び散っていた。

高村はガラスに自分の姿を映し、カードデッキをかざした。

「変身！」

真紅の鎧をまといミラーワールドに吸い込まれた。

ミラーワールドにモンスターがいるが、琥珀のライダーがすでに闘っていた。

琥珀のライダーは何匹もいる闘牛のようなモンスターを一体一体確実に仕留めていく。

しかし次から次へと増えていくのでキリが無い様子なので、高村は加勢した。

「誰だ！？」

琥珀のライダーは高村に刃を向けた。

それに気を取られた高村は後ろからモンスターの攻撃を受けてしまった。

「ぐわぁ！」

高村は数メートル吹き飛び倒れた。

琥珀のライダーはカードをホルダーにセットした。

「ファイナルベント」

地面は揺れ、モンスターの足元が割れ始めた。

モンスターは次々大地に飲み込まれていく。

あっという間にすべてのモンスターは地底の奥に消えていった。

琥珀のライダーはモンスターの殲滅を確認すると、高村の方に歩き出した。

「なんだ、フレイムか…。人の獲物を横取りしようなんて良い度胸だな」

倒れている高村を踏みつけた。

「く‥何するんだ‥」

高村は足を払いのけ立ち上がった。

「お前こそ誰だ！」

高村は琥珀のライダーに剣を向けた。

「なんや、やる気か？」

琥珀のライダーも短剣を構えた。

このライダーはもしかして宮下を…。

高村の頭に浮かんだ。
そう思うと怒りがこみ上げてきた。
怒りの感情に任せ、高村は攻撃を仕掛けた。
しかし高村の攻撃は全く当たらない。
逆に反撃され吹き飛ばされた。
「なんだお前、ほんまにフレイムか？」
倒れている高村に琥珀のライダーは追い討ちをかける。
高村は追い討ちを間一髪交わし立ち上がり、体勢を整えると、再び攻撃を仕掛けた。
「お前が宮下を！！」
そう言いながら高村は一心不乱に剣を振り回すがかわされるばかりだ。

「フレイムの中が誰か知らんけど、ほんまに殺すで！」

琥珀のライダーはカードをホルダーにセットした。

「アドベント」

地面がまた揺れ始めた！
高村は立つことが出来ず膝をついたが、揺れはすぐに収まった。

「組織の計画を邪魔しないでくれるかな」

これはマリアの声だ。

琥珀のライダーの後ろから、
純白のライダーが姿を現した。

「ライダー・シヴァ…っていうかマリアさん！」

琥珀のライダーは攻撃の構えを止めた。

「高村くん大丈夫？」

純白のライダーは高村に駆け寄った。

「マリアさんの知り合いですか？そいつにちゃんとルールを教えてあげといて下さいよ」

そう言い残し、琥珀のライダーは現実世界に戻っていった。

「マリアさん、宮下をやったのはあいつですか？」

「い：きなりね。残念だけど違うわ」

「でもあいつはオレを見るなり攻撃してきましたよ」

高村は立ち上がった。

「たぶん他に理由があると思うんだけど…」

「僕はただ助けようとしただけなのに」

「とりあえず私達も戻りましょう」

マリアは高村の手を引き現実世界に戻った。

2人は現実世界に戻ると変身を解いた。

「高村くん、ディアボロスのカードデッキの事考えてくれた？」

「それなら渡せません。僕バイト中だったんで戻りますね」

高村はマリアをその場に残しコンビニに戻った。

コンビニではアズマがキチンと代わりを務めていた。

「アズマくん、ホントに助かった！」

高村はアズマの肩を叩いた。

「これぐらい平気です！」

アズマは笑顔だった。

「オレ、高村さんの手助けをもっとしたいです！」

「ん？なんでオレの名前を？」

高村は驚いた。

「制服の名札を見たんですよ！」

確かによく考えればわかることだ。

高村は何かに動揺していた。

「い：いや、これで充分だから」

高村はアズマが着ている制服を無理やり脱がした。

「痛たたた、それじゃオレの気が収まりません！」

アズマは全く納得していないみたいだ。

「高村さんの弟子にして下さい！」

アズマは店の中で土下座をしだした。

店内の客の視線が気になる…。

「ちょっ！やめろって」

高村はアズマを起こそうとしたがビクともしない。

「弟子にしてくれるまでやめません」

どんどん視線が集まってきた。

ヒソヒソと客同士が喋っている。

高村はたまりかねた。

「わかった！言うとおりにするから顔をあげて」

アズマはそれでもやめなかった。

何故だ！

アズマの望むようにしたのに！

高村は思った。

「今の言葉、嫌々でゆったでしょ」

そんなの当たり前だ。

とりあえず収拾をとるためにいったことは間違いない。

アズマにそれを見透かされていた。

「アズマくんに弟子になってもらいたいなぁ？」

アズマは最高の笑顔で答えた。

「はい！頑張ります！！」

―高村のマンション―

高村はバイトを終えて部屋に戻っていた。

「何か疲れた…」

久々のバイトに入って、命を狙われて、変な奴に弟子入りされて。

最近平穏に過ごせる日がない。

高村はベットに横になり、そんな事を考えていた。

プルルル

高村のケータイが鳴った。

誰だ…、アズマだ。

「…もしもし」

「高村さん！バイト終わりましたよね？一緒にご飯とかどうっすか？」

何てテンションの高い奴だ。

断ってもうるさいと思った高村はアズマの言うとおり、食事を共にすることにした。

二人は近くのファミレスに来ていた。

電話口とは違い、アズマは静かだった。

「アズマくん、何かあった？」

高村は少し心配になった。

「モンスターに襲われた日から一人でいるのが怖いんですよ…」

確かにあんな怖い目にあって平気な奴はいないだろう。

高村は思った。

「いつまた襲われるかわからないじゃないですか…」

アズマはどんどん沈んでいく。

「いやほら、家も近くみたいだしいつでも助けに行くやん！」

「ほんまですか？」

アズマはうつ向いていた視線を高村に向けた。

「ほんまやって！」

高村は笑みを浮かべた。

食事中はたわいもない話で盛り上がり、高村自身も久しぶりに楽しい雰囲気を感じることが出来た。

二人は食事を終え、帰り道を歩いていた。

「あの時も帰り道やったんですよねぇ」

アズマは呟いた。

高村もあの日に闘っていく事を決心した。

お互いに別々の事を思い出し、それぞれ思いにふけっていた。

しばらく沈黙の中を歩くと、高村はスボンのポケットから黒いカードデッキを取り出した。

「…アズマくん。人を守る力が欲しくない？」

「人を守る力…ですか？」

アズマは言葉の意味が理解出来ずにいた。

高村は取り出した黒いカードデッキをアズマに手渡した。

「これがあれば、自分だけじゃなく周りの人も助けられる。その代わり勇気が必要やけど…」

アズマは手の中にあるカードデッキを見つめた。

「これであの姿に変身するんですね…」

高村は頷いた。

「一緒に闘えば、悲しい思いをする人が減らせるかも知れへん！ただ、アズマくんがしんどい思いをするけど…」

しかしアズマは迷わず高村に賛同した。

「分かりました。僕も出来る限り頑張ります！」

「ほんまに？良かった。ありがとうアズマくん」

高村とアズマは固く握手を交した。

そして高村はカードデッキをアズマに託すと、家に戻った。

家に戻るとベットに倒れ込むように寝転がった。

しばらく天井を眺め、アズマに渡したカードデッキの事を考えていた。

…どうしてカードデッキをアズマに渡したんだろう。

あの時なぜか、カードデッキを渡さないといけない、そんな風に思ってしまった。

どこからあんな気持ちが湧いてきたのか…。

勝手に思考が動いていた、完全に無意識に近い状態だった。

高村は不思議に感じていた……。

アズマは高村と別れた後、堤防に来ていた。

周りは暗く、川の向こう岸に建つビルやマンションの明かりが鮮やかに見える。

階段に座り、高村からもらったカードデッキを色んな角度から見ていた。

「オレが変身して闘うなんて…」

アズマは正直不安だった。

自分も高村のように闘えるのか…。

一度モンスターに教われて恐怖心が芽生えている自分に…。

改めて、カードデッキを受け取った重大さを感じ、川に映るビルの明かりを眺めるのだった。た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0965g/

仮面ライダーフレイム

2010年10月9日23時15分発行